現代日本語における条件構文基盤の談話標識(化)
—その形式と機能に関する類型試案—*
Conditional constructions as discourse markers in Japanese: Toward a typology of their form and function

藤　井　聖　子

1. はじめに

日本語において、節接続形態素を含む複文は、副詞節と主節とが形成する生産的構文である一方、様々な半慣用的・半生産的構文としても頻繁に用いられ、談話標識化・語用標識化の基盤構文ともなる。その場合、発話冒頭・文頭（左端）或は発話末・文末（右端）の文要素を基軸に談話標識化・語用標識化が生じやすい。本稿では、条件構文に焦点をあててこのような現象を考察する。

条件構文は、「と」「たら」「(れ) ば」「なら」「ても」「ては」等の節接続形態素を含む副詞節と主節とが複文を形成する生産的構文であるものの、発話左端で、「すると」「とすると」「だとすると」「たら」「だったら」「となれば」「なら」「ほ（ん）なら」「では」「じゃ」等文頭接続詞的に用いられたり、「どちらかというと」「なぜかというと」（左記は右記構文に一般化可能）「[　　] かというと」「[　　] かといえば」「実を言うと」「要約すると」「と思うと」「よかったら」「なぜなら」「本来なら」「言ってみれば」等ある語彙を伴い定型的に副詞的に用いられたりし、談話標識化・語用標識化している用法が多い。発話右端では、「…verb- たら↑」節や「「…verb-（れ）ば↑」節が（「どうですか」「良いのではないでしょうか」等の主部を伴わずとも）「提案」機能を表わす発話として定着し構文化しているのが一例である。

これらの現象に関して、一つ一つの事例の綿密な分析が必須であることは強調し確認するまでもない。[1] 同時に、これらの事例分析を動機付け有機的に繋げていくために、また、日本語の書き言葉コーパス（国立国語研究所）・話し言葉コーパス（国立国語研究所）が整備される中で、コーパスに付された形態素・語彙情報（短単位・長単位）の現行アノテーションにさらに付加するアノテーションを考案しコーパスに基づく分析を行うためにも、これらの現象の全体像を見渡しつつ、指標を明確化し類型を構築することが、理論・実証の両面で必要になってきている。そ

---

* 本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究「構文理論・用法基盤アプローチによる語彙と構文彙の統合的研究」（平成 22～25 年度，研究代表者：藤井 聖子）による助成をいただいています。本研究の一部前版を、国立国語研究所コーパス日本語学ワークショップにて発表した際、小椋秀樹氏、前川喜久雄氏、山崎誠氏（以上、国立国語研究所）、（指定討論者）茂木俊伸氏等より貴重なご批評をいただきました。また、馬場俊臣氏より氏のご玉稿情報を御教示いただきました。謝意を表します。

[1] 例えば、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻でも孫（in progress）や山田（in progress）の修士論文で有益な事例分析が進行中である（参考文献参照）。

こで、本稿では、条件構文基盤の談話標識化の諸相を複数のコーパスにて探索的に吟味しつつ、書き言葉コーパス・話し言葉コーパスを用いてこれらの現象を分析する際（またコーパスへの付加的アノテーションのために）必要となる指標や類型を考案し提示する。[2]

以下、2節でまず、本稿で対象とする条件構文の談話標識（化）の背景として、より広範な現象・意味領域を射程に含む包括的理論を整理する。3節では、発話冒頭・文頭における談話標識化の形式的類型として、大きく三つの型に大別し、(a) 拘束文法機能語の非拘束化型、(b) 指示詞照応型、(c) 動詞等述語を含む合成型をみる。4節以降は、3節3.1、3.2、3.3の形式的類型に交差する機能的特徴（「事態把握領域」による類型）や、共起語彙群・基幹語彙による特徴・機能、条件付けの仕方に関する類型などを考察する。

2. 理論的背景

2.1 談話標識・語用標識

ここで対象とする現象の多くは、まず、Schiffrin（1987）の見解・理論に依拠する「談話標識」discourse markersとして捉えられる問題である。Schiffrin（1987）は、談話においてトーク'talk'という単位を見いだし、discourse markersを、談話の中でトーク'talk'の単位を区切る連鎖依存の要素と操作的に定義付けている。発話先頭・発話末の標識が前方照応あるいは後方照応しつつトーク'talk'単位を括り、談話の意味展開の結束性に寄与する標識である。Schiffrin（1987）が、英語の談話分析において、その典型的事例として着目したのが、*oh*, *well*, *now* や *so*, *because*, *and*, *but*, *or*, *y'know* 等である。

日本語では、「ああ」「あら」「あれ」「まあ」等いわゆる間投詞といわれてきた類の表現や「ね」「よ」等様々な終助詞や、「だから」「だって」「で」「でも」「だけど」「或は」など結束性標識としてのいわゆる接続語がその典型的な類例である。日本語を対象にした研究においては、Maynard（1993）が"discourse modality"という考え方を提案し、Schiffrin（1987）のdiscourse markersを参考にしつつ、会話における相互行為性・共話性を一層重視し、「だから」「だって」「よ・ね」や情意副詞等の事例分析に加え、スピーチ・スタイルのスタイルシフトの問題も扱える枠組みを考案した。

同種の言語現象に関して、Schiffrin（1987）のdiscourse marker以外にも、discourse particle等他の概念・理論や用語が提示され、多くの言語で類例の分析が展開するとともに定義や射程に関しても議論されていたが、Fraser（1996）が、談話標識discourse markerやdiscourse particle等という範疇も含むより包括的かつ一般化可能な概念・範疇として、語用標識（pragmatic markers）

---

[2] 本稿での議論は、以下三種のコーパスの分析に基づいている。国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』（2008/2009特定領域研究・領域内公開版；2012公開版）、国立国語研究所『日本語話し言葉コーパス（CSJ）』（2005年第一刷；2012年第三刷）、および、34対の友人間会話（Fujii 1995-97）である。大規模である書き言葉均衡コーパスに比べ、後者2つの話し言葉コーパスは（話し言葉としては大きいものの）規模が異なる。

BCCWJ（2008/2009特定領域研究・領域内公開版）の分析においては、『BCCWJ領域内公開版』収録のテキストファイルを入力データとし、処理には、形態素解析ツールMeCab（http://mecab.sourceforge.net/、工藤拓、松本裕治）、及び、検索ツールChaKi（http://chasen.naist.jp/hiki/ChaKi/、松本裕治、浅原正幸）を用いた。BCCWJ2013版の分析には、国立国語研究所『中納言』検索アプリケーションを用いた。

という概念・用語を提示した。Fraser（1996）では、語用標識（pragmatic markers）の類型・細分化が提案されており、Fraser による語用標識の体系付けの中で、談話標識（discourse markers）を語用標識（pragmatic markers）の一種として位置づけることができる。本研究で扱う現象は、基本的対象としては談話標識であり Schiffrin によるその定義に適合するものであるが、狭義の談話標識の域を越えて語用標識の他の類（basic marker, commentary marker 等）としての機能を呈するものも含まれる。

2.2　語用化、談話標識化・語用標識化

このような談話標識・語用標識は、ほとんどの場合、元々そのための語として存在していたというより、他の統語的特徴・意味・機能をもつ語（多くの場合他の品詞・文法範疇）や語の組み合わせが談話の相互行為の中で繰り返し使用される中で、形式と語用的機能との結びつきが顕著になり定着化したものが多い。語用論と歴史言語学を横断する分野としての歴史語用論において、このような現象を、広く 'pragmaticization'「語用（論）化」と捉える理論や通時的研究や共時的研究が英語・日本語を含む多くの言語で展開してきていた（Traugott & Heine 1991, Traugott 2004 等 , Onodera 1995, 等 , 他）。この現象に関して "pragmaticization' の他に、引用構文等の語用化を分析した Suzuki（1999）では 'pragmatic particle-ization' という術語も用いられた。藤井（2008；科研課題 2006-2009）では、このような 'pragmaticization' を射程に、「内容語から文法的機能語へという文法化プロセスのさらに先に生じてくる現象、すなわち文法的機能語が本来の統語的特質を多少薄め、転じてより語用的機能を強化して語用標識に転化していく現象」を、文法的機能語の「語用標識化」と呼んだ。本研究でもこの意味で、「語用標識化」という概念・用語を用いる。特にその一種に関して、Fraser（1996）による語用標識の類型と包含関係に鑑み、発話冒頭ポジションで談話結束性や発話の手続き的意味の表象に寄与し談話標識的機能が定着化していくありさまを「談話標識化」と呼ぶ。

前述の「語用（論）化」の研究では、多くの言語で、「左端」（発話冒頭）或は「右端」（発話末）で語用化が生じやすいことが示され、その動機が考察されてきている。Fraser（1996）が英語の観察・記述を中心に語用標識（pragmatic markers）を総説する中で、"nearly all pragmatic markers may occur in sentence-initial position（*though* is one exception）and usually occur there."（p. 170）と述べていることに比べると、主要部終端型である日本語においては、右端位置での語用標識化がとりわけ重要であるといえる。

日本語の条件構文においても、右端（発話末）が語用標識化・談話標識化の温床となり易くなっている。右端（発話末）においては、（1 節でもみた）助言・提言の発話機能を呈する「～ば↑」「～たら↑」で完了する構文や、「～ないと」「～なければ」「～なきゃ」「～なくては」「～なくちゃ」で完了する前件発話において当為的「義務」機能が定着している事例等、本来従属節である条件構文の前件節が単独で独立節構文として用いられ語用標識化している現象がみられる（藤井 2008, etc.）。この場合、狭義の「談話標識」とは別の、語用標識の他の類型（Fraser の四類型では basic marker）となる。

以上、左端・右端、および、上位範疇語用標識とその細目を確認した上で、3 節以降では、本来節末・発話末で使用される節接続表現が、発話冒頭・左端位置にて使用される現象に焦点を絞る。

3. 条件構文基盤の談話標識化の形式的特徴に関する類型

まず、最も基本的な形式指標は、当然、接続形態素の形態上のバリエーション・選好性である。「と」「たら」「なら」「(れ) ば」等のうちどの接続形態素を用いているか、さらに、その接続形態素と以下でみる形式的タイプとの相関・選好性や、意味・機能との相関・選好性（または制約）の有無が実証的研究での基本的問題である。(接続形態素に関する指標自体は明確であるのでここでは議論を割愛する。) 4 節 4.2 項において、接続形態素の形態上の選好性に関して触れる。

2 つ目の形式的問題は、動詞句「…とする」「…となる」等が条件接続構文に参与し、その動詞を含む形態が接続構文として複合辞化している場合の扱いである。この現象は、動詞等内容語が条件接続構文に半定型的に参与し標識化するという点では、後述の基幹語彙の観点にも関連し、そこでは「言う」等発話動詞や「思う」等認知動詞等も参与する。ただ、それら複合的事例の間には、複合接続辞化という点で程度の差もある。本稿では便宜的に、「とする［条件接続形態素］」「となる［条件接続形態素］」を（複合辞とみなす一般的扱いに鑑み）3.1 項、3.2 項に含める。

日本語の条件構文の語用標識化・談話標識化の探求を目的にして、コーパスに分析用コーディングをする場合、まず構文の形式的特徴に関する作業類型として、少なくとも「拘束文法機能語の非拘束化型」「指示詞照応型」「動詞等述語を含む合成型」という類別が必要である。(三つ目の「動詞等述語を含む合成型」に関しては、参与語彙の品詞（動詞、形容詞、名詞）により細分されるが、ここでは割愛する。) これら三つの作業類型に関して、以下、3.1 項、3.2 項、3.3 項で述べる。三つ目「動詞等述語を含む合成型」に関しては、3.3 項での導入から 4 節・5 節（6 節）に続く。

3.1 拘束文法機能語の非拘束化型

本来非自立的である文法機能語が自由標識的な振る舞いをし、文頭接続語化しているものが筆頭に挙がる。因果関係や逆接・譲歩等の意味範疇では、馴染み深い「だから」「だって」「で」「でも」「だが」「が」等、殆どの一般的国語辞書でも語彙項目としてたてられ文頭接続語としての用法が含まれる類である。この類には、明確に語彙化していると考えられるものもあれば、談話の中で使用され新奇性を強く感じさせるものもある。世代や時代や地域によって受け止め方に差はあるものの、例えば、発話冒頭で用いられる「なので」は、『問題な日本語』(2004) に項目として立てられていることから、辞書編纂の観点からは後者（新奇性を感じさせる）とみなされたことが分かる。[3]

条件関係の意味範疇では、「ならば」「だったら」「でしたら」「だと」「ですと」「と」「なら」「では」「じゃ」等が発話冒頭で使われていることが、コーパスで認められる。その他（「S とすると S」「S となると S」「S とすれば S」等複合辞条件構文に依拠する）「とすると」「だとする

[3] さらに、『問題な日本語』にも未出の「だもんで」「なもんで」(Fujii 2000) は、発話冒頭用法としては、新奇性を感じさせる（談話標識化途上かどうか先行き不明の）事例にあたるだろう。「が」に関しては、Matsumoto (1988) が詳しい。

表１　発話冒頭で用いられる条件構文基盤の談話標識（一部例）［BCCWJ］：
拘束文法機能語の非拘束化型「だったら」「なら」「とすると」「だとすると」、並びに、指示詞照応型「そうだとすると」

	文頭「だったら」			文頭「なら」		文頭「とすると」		文頭「だとすると」		文頭「そうだとすると」	
	916			477		269		137		101	
レジスター（R）		ジャンル（G）		R	G	R	G	R	G	R	G
出版・雑誌	37			27		4		3		1	
出版・書籍	299	0 総記	2	121	2	73	3	35	1	21	1
		1 哲学	13		4		3		0		3
		2 歴史	8		6		7		2		0
		3 社会科学	22		20		11		5		10
		4 自然科学	1		6		6		0		0
		5 技術・工学	4		3		5		0		1
		6 産業	3		4		2		0		1
		7 芸術・美術	9		6		8		0		0
		8 言語	2		3		2		2		0
		9 文学	229		62		25		25		5
		分類なし	6		5		1		0		0
出版・新聞	0			4		1		1		0	
図書館・書籍	285	0 総記	1	141	1	139	0	52	0	45	0
		1 哲学	11		6		7		6		3
		2 歴史	3		7		13		0		5
		3 社会科学	21		15		25		5		10
		4 自然科学	2		6		7		2		4
		5 技術・工学	5		5		2		1		1
		6 産業	7		2		3		0		1
		7 芸術・美術	9		4		3		0		1
		8 言語	0		1		5		0		2
		9 文学	210		86		67		36		16
		分類なし	16		8		5		2		2
特定目的・ブログ	83			63		11		4		2	
特定目的・ベストセラー	51			15		27		4		6	
特定目的・教科書	0			1		2		0		0	
特定目的・国会会議録	11			11		3		8		17	
特定目的・知恵袋	150			94		9		30		9	
特定目的・白書	0			0		0		0		0	
特定目的・法律	0			0		0		0		0	
特定目的・広報誌	0			0		0		0		0	
	916			477		269		137		101	

と」「だとしたら」「となると」等の使用も広汎に認められた。(「なら」「だとしたら」「だったら」「じゃ」の用例を（1），（2），（3），（4）に示す。）国語辞典（出版または Web 版）において、これらの項目登録は統一的ではない。また、現行 BCCWJ では、「だったら」「では」「じゃ」「だと」は長単位・語彙素「接続詞」としての登録がある一方、その他に関しては（「なら」「でしたら」等も含め）構成形態素それぞれの短単位情報（および活用形）に留まり、その活用形自体が語彙化しているという判断での登録はないようだ。

これらの発話冒頭での使用は、（その表現が語彙化していると見なされるかどうかは別にして、少なくともその成り立ち・構成として）本来非自立的に用いられる判断詞「だ」や節接続形態素が、発話冒頭でむき出しで自由標識的に使用されている。本来非自立的である文法機能語が発話冒頭（左端位置）に出現することで、発話連鎖依存性を強く感じさせる標識である。

(1)「そうか！　なら、そっちも手伝ってやるぜ」BCCWJ 書籍：文学：LBh9_00051b

(2)「『聖なる石』が欠けたことが、異変の原因なのだろうか…　だとしたら　政堂へはどのように報告をすればよいものやら…」BCCWJ 書籍：文学：LBg9_00072b

これらの使用の中には、(1)（2）のように同じ話者による発話冒頭の場合と、(3)（4）のように話者交代後に別の話者が先の話者の発話を受ける場合とがある。また次項（5）のように（形式的には、次項 3.2「指示詞照応型」の用例だが）同じ話者による発話冒頭ではあるものの、先行発話が他者の引用であり、他者引用を照応している用法もある。

(3)「だったら、早くそれをいってください！」書籍：文学：LBm9_00145b

(4)
447. SJ5: ato = piano o hiku koto ka na ?
448. SJ5: piano.
449. TJ5: piano nai zyan.
450. SJ5: kiiboodo ga aru zyan.
451. TJ5: hiiteru ?
452. SJ5: hiiteru yo.
453. TJ5: watasi mita koto nai.
454. TJ5: Ikkai mo.
455. SJ5: tama ni hiku mon.
⇒ 456. TJ5: aa zyaa kondo kikasete morawanakya.　ああじゃ今度きかせてもらわなきゃ.
457. SJ5: e.
458. SJ5: e he he he he.
459. TJ5: nori umai no ?
460. SJ5: iya umaku-　(Fujii 1995-1997)

話者間・話者内いずれの場合も、「なら」「だとしたら」「だったら」「じゃ」が先行発話を照応し、その先行発話の事態を前提にして後続発話での発話行為を行っていることを示す標識として機能している。

話し言葉のみでなく書き言葉でも「拘束文法機能語の非拘束化型」の使用が公汎に認められるが、レジスター・ジャンルによって出現傾向が異なる。「だったら」「なら」「とすると」「だとすると」の BCCWJ での出現傾向を表 1 に示す。

3.2 指示詞照応型

文法的機能語に加えて「そう」「それ」等の指示詞が共起して談話の前方照応をしつつ、ある指示詞と接続形態素との組み合わせが談話標識化している類が頻繁に用いられている。(5) (6) (7) に「そんなら」「そうだとしたら」「それだったら」の用例を示す。

(5) フン、なに…千葉先生もこの梅太郎を叱っていたと… そんなら、その先生の娘が、お前などは相手にせず、この梅太郎を慕っている事実はどう解釈する？書籍：文学：LBa9_00025b

(6) そうだとしたら こんなにお化粧して香水をふりかけたりするでしょうか。書籍：文学：LBk9_00058b

(7)

	171	*I57:	nizyuusanniti made.
	172	*S57:	un.
	173	*I57:	+, zyuuroku kara nizyuusan made de sa.
	174	*I57:	+, sono ato dooyuu huu ni yaru no ka na?
	175	*S57:	iya yokuwakannai kedo.
	176	*S57:	ma zyuuroku kara nizyuusan made wa.
	177	*I57:	yannai desyo?
	178	*S57:	zissyuren mitaina kanzi desyo.
	179	*I57:	sono ato doo suru no ka na?
	180	*I57:	## hayaku kimetehosii yo na.
	181	*S57:	a nanka zyosii no gassyuku toka aru no?
	182	*I57:	un.å
	183	*I57:	ikitai n da. [=! laughing]
⇒	184	*S57:	maa sore dattara ii n zyanai no? まあ それだったら いい ん じゃない の？
	185	*I57:	e?
	186	*I57:	ii ka na?
	187	*S57:	un.
	188	*S57:	ma hatigatu toka da to tyotto mazui kamo sirenai kedo.
	190	*I57:	un.

(Fujii 1995-1997)

談話標識化プロセスについては、共時的データの分析に基づく一般化は避けるべきであるが、「そうなら」「それなら」の使用基盤から「なら」へ、「そうだとしたら」の使用基盤から「だとしたら」へ、「そうすると」の使用基盤から「すると」へ、というふうに、合成的な指示詞照応型の談話での使用が拘束文法機能語の発話冒頭での非拘束的新奇使用の基盤となり、自由標識化の基盤となっているという仮説が妥当であろう。従って、共時コーパスの分析で作業仮説としているのは、「拘束文法機能語の非拘束化型の使用が観察される場合は、その談話標識に対応しその基盤構文となる指示詞照応型が可能であり使用されている」という仮説である。この点で、3.1. の「拘束文法機能語の非拘束化型」として出現するものは、「そうならば」「そうだったら」「それだったら」「そうでしたら」「そうだと」「そうなら（そんなら）」「それでは」「それじゃ」「そうだとしたら」「そうだとすれば」「そういうことなら」等、指示詞共起の指示詞照応型の発話冒頭での使用が認められた。

3.1 で既出の表 1 に、指示詞照応型の「そうだとしたら」の使用傾向を、拘束文法機能語の非拘束型の対応する形式「としたら」「だとしたら」とともに示す。本稿で報告する分析では、定量的分析による検証は主目的としていないが、「としたら」「だとしたら」「そうだとしたら」三つの使用を相対的に比べてみると、形態的・統語的に最も飽和している指示詞照応型の「そうだとしたら」が最も頻度が低いことに気づく。逆にいうと、非自立機能語が文頭でむき出しになっている「としたら」「だとしたら」の方がより頻繁に選好的に使用されているということである。このことは、指示詞を伴わずとも、非自立機能語を文頭・発話冒頭で用いて連鎖依存性を強く感じさせつつ前方照応する「としたら」「だとしたら」が、その未完の形式ゆえに前方照応機能を確立させていると捉えることができるのではないだろうか。

この指示詞照応型に参与する指示詞はソ系が最も広汎に使用されている。定着化・慣用性・語彙化度が相対的に強い「そうしたら」「そしたら」等もソ系である。意味機能的にソ系のみで可能なもの（例：「そういえば」）もある一方、コ系やア系も出現可能な意味文脈・談話標識もある。ソ系のみでなくコ系での使用が顕著なのが、「これでいくと」「こうなると」等である（「そうなると」も勿論使用されている）。ソ系かコ系かに関しては、5 節において後述の「発話（間相互行為）における条件付けの仕方」によって動機付けられている変容であると考える。

3.3　動詞等述語を含む合成型

内容語の条件形が軸となる合成型も広汎に使われている。「具体的にいえば」「言ってみれば」「あえて言えば」「言い換えれば」「詳しく言えば」「なぜかと言えば」「正直にいうと」「まとめると」「例えていうなら」「さらにいうなら」「極言すれば」「極論すれば」「補足すれば」等、ある語彙とともに副詞的に用いられ（ある程度）定型的な条件表現の使用がコーパスで多種認められる（表 2 参照）。「よかったら」「よろしければ」における形容詞等、動詞以外の述語が含まれる場合も、この類型の細分とみなす。）

自立語・動詞等を含み（3.1 でみた拘束文法機能語の非拘束化型等と異なり）非自立機能語がむき出しで発話されるわけではなく、内容述語の条件形を基軸に一応節を形成しており、語彙化した談話標識に比べると通常の生産的条件複文により近い。（BCCWJ, CSJ からの用例抜粋を、4 節の（11）（12）（13）に示す。）

とはいえ、ある語彙群とともに使われ（ある程度）定型的であることに加え、その述語の項が（主語も含めゼロになっていること自体は日本語に一般的であるが）特定の指示をもつ特定ゼロ照応（definite null instantiation）ではなく、不定的（indefinite null instantiation）或は文脈指示であることが多い。また、談話標識としての用法では、項を明示的に補っても適切な同機能の発話にはならないことから、文脈において指示認識可能な項がゼロ照応になっていると考えるより項の指示性自体が希薄化していると考えられる。さらに、次節以降でみるように機能的特徴をもつ。

これらの「動詞等述語を含む合成型」の機能や参与語彙の特徴について、4節で引き続き考察する。

4. 機能的特徴

4.1 基盤条件構文の「事態把握領域」による類型

以上みたような種類の条件前件表現が発話冒頭で使われる際、その発話内での機能に関しても特徴がある。発話内での機能の明確化のために、基盤条件構文の「事態把握領域」による類型を援用した。Sweetser（1990）は、条件文が異なる「言語概念レベル」・「事態把握領域」において表象・解釈されることを指摘し、内容レベルの事態把握領域、認識レベルの事態把握領域、発話行為レベルの事態把握領域において、内容的条件文（例：8）のみでなく非内容的条件文が可能であることを示した。後者の非内容的条件文には、認識レベルでは（9）のような認識条件文、発話行為レベルでは（10）のような発話行為条件文等がある（藤井2012参照）。（なお、Sweetser等の最近の研究では、この現象の捉え方が、異なるメンタル・スペースでの事態把握として統合され理論が再構築されてきている。ここでは、異なる「言語概念レベル」・「事態把握領域」での条件構文の意味機能自体を明示・例示することが目的であるので、この議論は割愛する。）

［ｉ］内容（Content）レベル
（8）名医が早期に手術をすれば、きっと良くなるだろう。

［ii］認識（Epistemic）レベル
（9）良くなったのなら、きっと名医が早期に手術したのだろう。

［iii］発話行為（Speech Act）レベル
（10）手術をご検討でしたら、こちらに可能医療機関と医師のリストがあります。

このような事態把握領域による条件文の類型に鑑みて、談話標識・語用標識的な用例を分析すると、内容的条件文（予測的条件文）もみられるが、非内容的条件文（非予測的条件文）が多く、発話行為条件文の類や、認識条件文・メタ言語条件文の特性を呈する類が多いことが分かった。先に3.1節において「なら」「だとしたら」「だったら」「じゃ」が、3.2節において「そんなら」「そうだとしたら」「それだったら」が、談話における先行発話を照応し、その先行発話の事態を前提にして後続発話での発話行為を行っていることを示す標識として機能していることをみ

た。その発話行為の様相に変容はあれ、概ね発話行為条件文としての特色を共有している。

(11) 簡単に言うと、円レートが上昇すると、外貨建ての輸出価格は上昇し（[括弧内省略]）、輸出数量は、減少する。BCCWJ_OW：OW4X_00505b

(12) 白状すれば、わたしも彼女にはひかれていた。（書籍：文学：LBe9_00203b）

(13) したがって悲しい出来事。ということで。（F え）お話しする場合に。あまり私自身（F えー）残ってないんですが。強いて（F えー）言えば。長いこと（F おー）飼ってた（F あー）犬が。（F あー）老衰で死んだと。いうことを思い出して。（CSJ2005：S02M1698）

4.2 非内容的条件構文の機能細目

日本語の非内容的条件文のこれらの用法を分析するために、Speech act modifiers, Rhetorical connectors（Fujii 1993, 1994, etc.）などの機能細目を用いてきた。BCCWJ, CSJ からら抽出したこれらの例を、表 2 に示す。

「「はっきり言えば」「正直言うと」「何を言いたいかというと」「本音をいえば」「本当のことをいえば」「どっちかといえば」「白状すれば」（例 12）等は、発話に発話者自ら註釈付与をしつつ条件付きの発話・発話行為を行うための談話標識としても使われている（Speech act modifiers 発話行為調節標識）。

「要約すると」「簡単に言うと」（例 11）「言い換えれば」「さらに言えば」「詳しく言えば」「結論をいえば」「より正確に言うと」等も同様に発話行為の条件付けに寄与するが、同時に談話構造の中での結束性や発話間関係の手続き的意味に寄与している。このような修辞連結性機能に着目して、Rhetorical connector 修辞連結標識と呼んだ。

Rhetorical connector 修辞連結標識の一種として、「[　　] かというと」構文や「[　　] かといえば」構文等、疑問文を修辞的に提示する談話標識も重要である。「かというと」の直前には可変節が挿入され意味合成される半生産的構文（'idiomatic construction', 'formal idiom'）として構文化しており、書き言葉・話し言葉ともに使用頻度も高い。この構文依拠の具象構文として「なぜかというと」「どっちかというと」等が定型化している。話し言葉では、「[　　] かっちゅうと」「[　　] かといいますと」等の同構文依拠のバリエーションも数種使われている。

「この立場でいくと、…となる」「…比べると、…分かる」「…を見ると、…分かる」等、表現上内容的条件文の論理構造を帯びている場合も、前件で談話での論旨展開上の条件付けをし、後件でその見地・視点・立場での結論を述べる発話であり、認識条件文と発話行為条件文とメタ言語的条件文との折衷バリエーション（複合事態把握領域的）であると捉えられる。

どの接続形態素でもこれらの機能細目が概ね可能ではあるが、それぞれの接続形態構文の選好的な使用（傾向）も重要である。例えば、Speech act modifiers 発話行為調節標識や修辞連結 Rhetorical connectors の談話標識においては、「と」の使用が異なり頻度的にも出現頻度的にも相対的に多い。これは、（スタイル要因の他）基盤構文としての「と」接続構文の意味的特徴（「たら」「(れ) ば」「なら」接続構文の意味的特徴）に多分に動機付けられたものである（Fujii 1993,

表２　語用標識・談話標識として用いられる条件構文：述語を含む合成型（一部例）［BCCWJ］［CSJ］

		と	（れ）ば	たら	なら
	B	**「…言うと」系**	**「…言えば」系**		
speech act modifier	C	「ほんというと」	「実をいえば」		
発話行為調節	C	「じつをいうと」	「（もっとはっきりいえば」		
	W	「本心をいうと」	「早くいえば」		
	J	「率直にいうと」	「遠慮なくいえば」		
		「あえていうと」	「あえて言えば」		「敢えていうなら」
		「正直言うと」	「言ってみれば」		
			「正直言えば」		
⇧		「本音をいうと」	「本音をいえば」		
{相互排他的な特質		「本当のことをいうと」	「本当のことをいえば」		
ではない}		「告白すると」	「ほんとをいえば」		
⇩		「極言すると」	「白状すれば」		
		「極論すると」等	「極言すれば」		
			「極論すれば」等		
meta-linguistic marker		「簡単ににいうと」	「言い換えれば」	「簡単にいったら」	「例えていうなら」
メタ言語的		「一口にいうと」	「さらに言えば」	「率直にいうたら」	「ついでにいうなら」
		「どちらかというと」	「詳しく言えば」		「さらにいうなら」
		「まとめていうと」			
		「（その）概要を述べると」	「概していえば」		
rhetorical connector		「参考まで述べると」	「大きくいえば」		
修辞連結的		「ついでにいうと」	「結論をいえば」		「なぜなら」
		［　　］かというと	「例えていえば」		
		「何かというと」	「わかりやすくいえば」		
		「なぜかというと」	「もっと分かりやすくいえば」		
⇧		「その意味でいうと」	「補足すれば」		
{相互排他的な特質		「…比べると」	**［　　］かといえば**		
ではない}	B	「[スライド,図,表等] をみると」	「なぜかと言えば」	［TOPIC］ときたら	
⇩	C				
	C	［TOPIC］というと	「それはなぜかといえば」	［TOPIC］ったら	［TOPIC］なら
	W	［TOPIC］について触れると	「どちらかと言えば」		
	J	［TOPIC］を参考まで述べると			
perspective-taking marker		「これでいくと」	［TOPIC］といえば		
視点・観点設定		「この立場でいくと」	「そういえば」		「常識的に考えるなら」
		「この立場でいうと」			
evidential source marker		Xによると	Xによれば		
証拠性ソース設定		［一人称］にしてみると：	［一人称］にしてみれば：		
		「私にしてみると」	「私にしてみれば」		
		「僕らにしてみると」	「僕らにしてみれば」		
		［三人称］に言わせると	［三人称］に言わせれば		

speech act modifier	C	「いってしまうと」			「添えるなら」
発話行為調節	S	「厳しく言うと」	「敢えていえば」		
	J	「具体的に言いますと」	「強いていえば」		
rhetorical connector		「（もう少し）詳しく言いますと」	「（簡単に）いってしまえば」		「なぜなら」
修辞連結的		**［　　］かというと**	**［　　］かといえば**	「と思ったら」	
		［　　］かっちゅうと	「どちらかといえば」		
perspective-taking marker		**［　　］かといいますと**	「そういえば」		
視点・観点設定		「どっちかっつうと」	［TOPIC］といえば、等		
		［TOPIC］っていうと			
		「そういう点でいうと」等			

1994, etc.)。同様に、基盤構文としての「と」「たら」「(れ) ば」「なら」接続構文の意味的制約によって、他の接続形態素が選好的に使用されていると考えられる現象もある。先に (3.1, 3.2, 4.1 項等にて)、条件構文基盤の談話標識が、談話における先行発話を照応し、その先行発話の事態を前提にして後続発話での発話行為を行っていることを示す標識として機能しているという一般化した記述を提示したが、その発話行為細目には様々なものがある。発話行為レベルでのこのような談話標識の使用において、主部で遂行される発話行為によっては (例えば、要求・依頼や詰問・苦情述べ等の発話行為の場合)、特に「と」接続構文が使用制限を受け不可になることがある。従って、それらの発話行為が主部で遂行されている発話においては、「だったら」「それだったら」「なら」「それなら」等の談話標識が選好的に使用されている。

5. 共起語彙群・基幹語彙と談話標識・語用標識の機能的特徴

談話標識化・語用標識化に関する分析は、談話における相互行為とダイナミックな文法使用の視点で興味深いとともに、「語彙と構文」の観点からも興味深い。条件構文全体の使用をコーパスでみると、前件条件節においてある特定の語彙との共起傾向がみられる。共起頻度の高い動詞 (自立) は、上位から「する」「なる」「ある」に続き、「言う」が最も共起性が高く、次が「思う」である。これらは節接続構文全体での共起語彙であるが、発話左端で談話標識として用いられる条件構文に関しても、動詞等述語を含む合成型では、言動系 (特に「言う」系) 語彙、及び、思考・認知系語彙が顕著な共起語彙群である。特に「言う」という語彙が参与する談話標識 (「・・・言うと」「・・・言えば」等) が、異なり頻度的にも出現頻度的にも突出している。これら共起語彙群の語彙的意味は、4 節で考察した「事態把握領域」という指標での特徴に関連しており、談話標識としての機能的特徴 (特に発話行為条件付け、認識条件付け) に寄与していると考える。

6. 発話 (間) 相互行為における条件付けの仕方に関する類型

発話 (または発話間相互行為) における条件付けの仕方を考察してみると、異なる条件付けの仕方が観察できる。その大別を、著者の研究で「間主観的条件受け (話者間条件受け)」「主体的条件付け (話者内条件付け)」と呼ぶ。これは通常の複文構造の条件構文においても生じる様相であり、談話標識化した場合も同様の条件付けのバリエーションが可能であることが分かる。

6.1 間主観的条件受け (話者間条件受け)

条件文を用いる際、談話・会話における先行発話・先行文脈で提示された内容を受けて、前件が先行発話・先行文脈の内容に言及し、その内容を前提に後件の発話 (疑問や依頼や言明等発話行為を伴うものが多い) が提示されることがある。まず、通常の複文構造の条件構文でのこのような発話を (14) に例示する。

(14) H：明日サンフランシスコで会議。ジャパン・タウンで食べようかな。
E：サンフランシスコにいくんだったら、紀伊国屋で本買ってきてくれない？

(14) の話者Eの発話は、話者Hがサンフランシスコに行くこと（ほぼ確実な予定）を明示的に知らされた直後に、その計画に条件構文前件で言及しているのであって、かなり蓋然性の強い事態として受け止めた上でのことである。その前件事態に対する認識的態度としては肯定的な態度であるにも関わらず、このような文脈での発話においては条件構文を使用することが多く、特に日本語では名詞化した前件形式「[S] のだったら」「[S] のなら」を使用するのが自然である。この際の前件事態は、話者以外（会話の聞き手）から会話場で与えられた内容であり、話者は他者から受けた情報を前提にしていることを言語化しつつそれを前提にした発話行為を後件で発話している。このような条件付けの様相を「間主観的条件受け（話者間条件受け）」と呼ぶ。

(15) H：明日サンフランシスコで会議。ジャパン・タウンで食べようかな。
E：だったら、紀伊国屋で本買ってきてくれない？

さて、この同様の「間主観的条件受け（話者間条件受け）」の発話を、(15) に示すように「だったら」のみで言及することも可能である。先に3節で、「だったら」の基盤構文として「[指示詞] だったら」をあげていたが、「[S] のだったら」構文も「だったら」の重要な基盤構文である。ここで重要なことは、談話標識化した「だったら」の条件付けの様相が、その基盤構文「[S] のだったら」構文のそれを継承していることである。先に3節の (3) (7) で例示した「だったら」「そうだったら」も同様に「間主観的条件受け（話者間条件受け）」で用いられている。

6.2 主体的条件付け（話者内条件付け）

一方、発話者内（筆者内）で条件付けを行う発話も多い。特に、語用標識化・談話標識化している条件構文のうち、4節で Speech act modifier や Rhetorical connector として提示した類型（例：(11) – (13)）では、話者が後件で提示しようとしている発話行為や言明や認識的判断・結論をどのように解釈して欲しいかに関して話者自身が注釈を述べているわけで、その条件付けは主体的であり話者内（話者内発話、話者内思考）において成立しているものである。

6.1 項で「だったら」の間主観的条件付けでの使用（例：15）をみたが、（間主観的条件受けの頻度が高いものの）前文脈を照応し話者内で主体的条件付けをする発話で使われることもある。例えば、(16) は CSJ のモノログからの用例であるが、過去の事態に対する自分の過去の感情・評価を述べた後、その前発話を「だったら」で照応し自らが評価を述べた既定事実を条件とする主体的条件付けを表出している。

(16) (F ま) 発表会って言うか (F ま) ファッションショーという形で。(F ま) 自分達で全部企画をして。て (F あのー)。(F ん) (F ま) (F え) (F あの) ショーを (D す) (F あのー) ショーに起こして (F ま) お客様を呼んで。っていうことを (D やっ) やったんですね。でその時に (F あのー) 凄く (F まー) 自分の中で。うまく (F その) 作品ができたとかそういったことではなかったんですけれども。(F ま) 凄く楽しかったんです。

でだったら（F ん）もう家政科とかそういったもう専門学校の方に行けば良かったんだと後から。後悔したぐらいだったんですが。（CSJ2005：S01F0074）

6.3 談話標識「だったら」：発話（間）相互行為における条件付けの仕方

BCCWJ において文頭・発話冒頭で談話標識として用いられている「だったら」907 用例[4] すべてに、(i) 間主観的条件受け［話者間条件受け］か（ii）主体的条件付け［話者内条件付け］かに関するコーディングをしたところ、907 トークン中、43%（386 例）が間主観的条件受け（話者間条件受け）、57%（521 例）が主体的条件付け（話者内条件付け）であった。さらに、前文脈の発話機能を分析したところ、後者主体的条件付け 521 例のうち、38% が質問や確認問いかけ発話であった。これら質問や確認問いかけ発話が先行する場合は、その質問や確認問いかけへの応答を（架空のものも含め）想定しつつの間主観的な条件付けが認知プロセス上想定可能になると考えられる。

とはいえ、発話左端での「だったら」は、書き言葉でも話し言葉でも、間主観的条件付けに限らず、主体的条件付けにも使用されている事実は注目に値する。母語話者内省では、間主観的条件付けでの用法、しかも、話者交替が生じた直後での使用が優勢である、という直感をもつ話者が多いであろう。しかし、コーパスを分析することにより、この指標一つとってみても、言語内変容を見逃さず質的分析を深める必要があることを改めて思い出すことができる。

7. おわりに

本稿では、条件構文基盤の談話標識化・語用標識化の諸相を、現代日本語書き言葉均衡コーパス（国立国語研究所）や、日本語話し言葉コーパス（同）や会話コーパスを用いて分析するために指標としている（発話冒頭で使用される）条件構文の形式的類型、共起語彙群・基軸語彙、意味・機能的類型（(「事態把握領域」による類型、非内容的条件の機能細目)、条件付けの様相等を考察した。BCCWJ・CSJ における（また語彙調査における）長単位・語彙素に関する議論の種にもなれば幸いである。BCCWJ・CSJ における単位認定は、コーパス構築段階で様々な要因が考慮され一貫性（同時に、コアデータからの自動学習の精度）を優先課題として確立された賜物であるが、本研究で対象とした談話標識化に係る現象は BCCWJ のような均衡大規模コーパスが完成した暁に、その恩恵ゆえに新たな分析と再検討が可能になる問題でもあるだろう。

条件構文基盤の談話標識の形式的類型に関しては、「拘束文法機能語の非拘束化型」「指示詞照応型」「動詞等述語を含む合成型」という類別を提示した。それら類別は、3.2 項（表 1）で考察した「指示詞照応型」と「拘束文法機能語の非拘束化型」との使用傾向の比較など、相互比較から談話標識化の様相やメカニズムを明らかにするために必要となる類別である。（分類自体に意義があるわけではない。）共起語彙群、意味・機能的類型（特に、非内容的条件構文の機能細目）や、条件付けの様相（間主観的条件付け、話者内主体的条件付け）に関して論じた質的峻別に関しても同様のことがいえる。

---

[4] 表 1 では文頭・発話冒頭の「だったら」が 916 例抽出されているが、一例ずつ文意・形式を読み取ったところ、9 例は曖昧なケースや誤解析であったためこの分析からは除外した。

本稿「はじめに」で述べたとおり、一つ一つの事例の綿密な事例分析が必要であることは再確認するまでもない。条件構文の談話標識化・語用標識化の体系や（この特定領域における）理論構築は、コーパス分析の結果見直されて当然である故に、継続中の本研究における作業指標・作業類型・仮説を、事例分析の積み重ねとともに研ぎ続けていかねばならない。

参照文献

Fraser, Bruce (1996) Pragmatic Markers. *Pragmatics* 6 (2): 167-190. International Pragmatics Association.

Fujii, Seiko Y. (1995) Mental-space builders: Observations from English and Japanese conditionals. In Shibatani, Masayoshi & Thompson, Sandra (eds.), *Topics in Semantics and Pragmatics*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. 72-90.

Fujii, Seiko Y. (1995-97) Conversations in Japanese: 34 pairs of casual dyadic conversations.

Matsumoto, Yo (1988) From bound grammatical markers to free discourse markers: History of some Japanese connectives. *BLS* 14: 340-351.

Maynard, Senko K. (1993) *Discourse Modality: Subjectivity, Emotion and Voice in the Japanese language*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Onodera, Noriko (1995) Diachronic analysis of Japanese discourse markers. In A. Jucker (ed.) *Historical Pragmatics. Pragmatics Developments in the History of English*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. 393-437.

Schiffrin, Deborah (1987) *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.

Suzuki, R. 1999. *Grammaticization in Japanese: A Study of Pragmatic Particle-ization*. Ph.D. dissertation, University of California, Santa Barbara.

Sweetser, Eve. (1990) *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Traugott, Elizabeth C. and B. Heine. (1991) *Approaches to Grammaticalization*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Traugott, Elizabeth C. (1995) The role of discourse markers in a theory of grammaticalization. Paper presented at the 12th International Conference on Historical Linguistics, Manchester.

Traugott, Elizabeth C. (2004) Historical pragmatics. In L. Horn and G. Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*. Oxford: Blackwell. 538-561.

北原保雄（編）（2004）『問題な日本語』大修館書店

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ)』（2008 版、2009 版、2012 版）

国立国語研究所『日本語話し言葉コーパス（CSJ)』（2005 版、2013 版）

孫羽（in progress）『「那 nà」と「だったら」の対照分析』（仮）東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士論文（進行中）

馬場俊臣（1999）「複合接続詞の体系的考察の試み」『語学文学』37 号、19-29. 北海道教育大学

馬場俊臣（2002）「複合接続詞の語形と語彙的意味」『語学文学』40 号、75-84. 北海道教育大学

藤井聖子（2008）「話しことばの談話データを用いた文法研究：話し言葉で構文機能が強化する？―「～ないと」「～なきゃ」「～なくちゃ」の文法―」長谷川寿一・伊藤たかね・C. ラマール（編）『心とことば―進化と認知科学のアプローチから』、pp.129-151、東京大学出版会

藤井聖子（2012）「条件構文をめぐって」澤田治美編『構文と意味』pp. 107-131. ひつじ書房

山田彬尭（in progress）『「そういえば」の分析からみた談話管理理論』（仮）東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士論文（進行中）